

建築理論について

お茶の水女子大学名誉教授・工学博士 田中 辰明

はじめに

本誌2025年3月号から6月号にかけてベルリン工科大学建築学部主任教授イエルク・グライター教授 (Prof. Jörg Gleiter) の著書「グライターの宇宙・建築 (Gleiters Universum / Architektur)」の和訳を掲載した^{1)~4)}。グライター教授は「建築理論」を専攻され、建築理論の講座を主宰されている。日本では「建築理論」を専攻している学者は少なく、論文発表されている方々は太田邦夫東京理科大学名誉教授、八束はじめ元東京理科大学教授、中谷礼仁早稲田大学教授、五十嵐太郎東北大学教授、倉方俊輔大阪公立大学教授、藤村龍至東京芸術大学准教授などをあげることが出来る。グライター教授は「生成AIが発展すると条件を与えれば建築設計は出来るようになる。そういう時に建築家、また建築家を目指す学生たちはどう対処すべきか」という発想でこの本を著したそうである。しかしこの翻訳は非常に読みにくかったのも事実であった。アリストテレス、カント、ショーペンハウアー、ニーチェなど多くの西洋哲学者の言葉が多く引用されていた。こういった事が訳文を読むにあたって理解の困難さを与えたのかもしれない。



イエルク・グライター教授

では「建築理論」とは何か、グライター教授の別な文章から建築理論を説明しよう。

第1章 建築理論、思考方法

思考と行動は、一般的な文化的な力場と呼ぶことができるより大きな文脈の中に位置しており、この文脈から切り離されると、それらの性質が変化してしまいます。したがって、思考と行動は常に文脈によって、たとえそれが無意識的であり、表面的には偶然のように見えたとしても、あらかじめ構造化され、動機付けられ、正当化

されています。日常生活において自らの行動を決定する動機や衝動について、自覚的に考えたり、それらがどのように作用しているのか、さらには何によって引き起こされ、どのように正当化されているのかを意識する人は少ないでしょう。

こうして、理論の領域が概説されます。理論とは、これらの関係性や依存性、動機や衝動を可視化し、認識可能にするための営みを指します。建築理論はこれを、デザインされた環境の広大な領域に焦点を当てて行います。既存の建築物について、その意図や制作方法、人々への影響、解釈のされ方に関する問いを立てる場合、建築理論の分析的・体系的な側面が明らかになります。一方で、未来の建築物の設計に関する問い、建築家がそれに込める意図、その建築物がどのように制作されるべきか、どのような効果をもたらし、何を意味するべきかに関する問いでは、建築理論の統合的・創造的な側面が現れます。

建築理論とは、建築のプロセスを構造化する思考モデルを明確化し、意識化することです。「単なる技能ではなく、思考の方法を形成することの方が重要である」と、バウハウスの創設者であり、20世紀を代表する建築家の一人であるヴァルター・グロピウス(1883-1969)は述べています。グロピウスによれば、建築には材料や構造の論理だけでなく、願望やニーズの論理、さらに使用と利用の論理も存在し、これらが建築をその複雑性の中で前提的に構造化しているのです。

建築理論、建築の実践、そしてその使用は一体となって現れます。それでは、建築理論の営みをどのように捉えるべきなのでしょう。その方法論は何であり、どのような方法論を示唆するのでしょうか。また逆に、実践は建築理論にとって何を意味するのでしょうか。そして最後に、建築理論が建築家、利用者、そして社会とどのような関係を持つのかという問いも重要です。

1. 建築

建築理論に近づくためには、まず建築とはそもそも何を意味するのかを明らかにすることが重要です。これが、

建築理論とは何を指すのかという問いに答えるための必要な基盤を築くでしょう。この点を探るために、動物界に目を向けるのは示唆に富むことかもしれません。多くの動物種が驚くべき建造物を作り上げます。例えば、スズメバチやアリのように共同で建築する場合もあれば、クモ、ビーバー、キツネのように個々で建築する場合もあります。彼らは巣、網、洞窟、堤防を作り、洗練された技術を駆使し、形式的な整合性を持った構造を作り上げます——例えば蜂の巣や蜘蛛の巣を考えるだけでもその素晴らしさが分かります。

フリードリヒ・キースラー(1890-1965)という風変わりなアメリカの建築家は、未完成のタイプスクリプトとしてしか残されていない彼の著書『マジック・アーキテクチャー』(1940年)で、シロアリが自らの丘をどのように建築するかを示す画像を紹介しました。まず、彼らは柱のような構造を作り、それから柱と柱の間に藁を置き、最終的にこの形をアーチ構造に作り上げます。キースラーはこれについて次のようにコメントしました。

「シロアリがアーチを建築している。(アーチは人類の発明とされている)[砂粒で2本の柱を立て][2本の柱を補強するために草の茎を置く]」。

キースラーは、シロアリのアーチ構造を、ローマ皇帝カラカラのもとで206~216年に建設され、現在も部分的に残っているカラカラ浴場の巨大なアーチと比較しました。ギリシャのアルカディコでは、紀元前1300年まで遡るアーチ構造が確認されていますが、この技術を完成させたのはローマ人でした。最も古い現存するローマの石橋は、紀元前600年ごろに建設され、テヴェローネ川に架かるボンス・サラリウスです。動物界と比較すると、人間がアーチ構造を発明したのはかなり遅かったと言えます。

ここで問いが生じます——動物の建築物も建築と呼ばれるべきではないでしょうか?何が、スズメバチの巣とアンドレア・パッラーディオ(1508-1580)の有名なヴィラ・ロトンダを比較し、同列に置くことを妨げるのでしょうか?どちらもそれぞれの方法で完成された建築物です。もしヴィラ・ロトンダが建築の最も偉大な傑作の一つであり、最高の意味での建築であるならば、同じように形式的に完成されたスズメバチの巣にも建築としての地位が与えられるべきではないでしょうか?

この問いに答えるためには、建築理論的な5つの基準を適用することができます。

1. 美的観点では、特に朝露が逆光に輝く蜘蛛の巣は、その美しさにおいてほとんど比類がありません。
2. 構造的観点では、スズメバチの巣はピエル・ルイジ・

ネルヴィ(1891-1979)が設計したホールの構造に劣らないほど洗練されています。

3. 機能的観点では、動物の作る建造物は完璧であるように見えます。動物たちは常に同じ設計図に従って巣を作りますが、人間の建築物は通常、ひとつとして同じものはありません。
4. 社会的観点、つまり社会の組織化に関しては、蟻塚は人間の都市、特に無視された居住区やそこから生じる社会的緊張、破壊行為、暴力といった問題を抱えた都市よりも優れているように見えます。
5. 意味論的・表現的観点、つまり意味と効果に関しては、動物の建造物は明確で分かりやすいのに対し、人間の建築物はしばしば議論を呼び、評価が分かれることがあります。なぜなら、動物と異なり、人間は自由であり、いつでも異なるもの、または新しいものを建てることができるからです。人間は建物を設計することができるが、その計画を破棄し、その後に全く異なるものを作ることも可能であります。何を建てるのか、どのように建てるのかは、建築家が自由意志と責任のもとで決定することであり、その責任は依頼主、社会、そして建築という学問領域に対して負うものである。

ミツバチとは対照的に、建築家は理想的には、どのように建てるべきか、どの素材を使用すべきか、それらをどのように加工し、どのように組み合わせるべきかを決定します。その結果として、特定の人間のニーズや願望に適した空間構造が生み出されるのです。このようにして建築の定義が浮かび上がります。

建築とは、人間が自由な意思決定によって、自らに適した、変化する欲求や不変の欲求に応える意味深い環境を創造する文化的実践です。その環境は、自然のままの状態とは異なるものであります。そして、文化的な力の場がもたらすダイナミズムによって、建築は常に変化する文化的実践として現れます。

この定義には、三つの問いが一体となって含まれています。

1. 建築が人間の変わらない欲求と変化する欲求に関して議論される場合、その基盤には人間学的な視点があります。
2. 建築と個人が相互にどのように影響し合うかという知識に関する議論、これには物質的、構造的、社会的要素が含まれるが、その基盤には認識論的な視点があります。
3. しかし、建築を感覚的な知覚の出来事として捉え、それがどのように感覚的に経験され、解釈されるかと

という問いに向き合う場合、美学的な視点が現れます。この際、人類学的、倫理的、認識論的な側面は、建築とその多様性の中でよりよく記述し理解するための分析のカテゴリーに過ぎません。理論で分けられているものは、実践と経験の中で多様に絡み合っています。

2. 建築理論

前述のように建築を定義する際、「適切さ」という概念が中心的な位置を占めます。この「適切さ」(aptum)は、建築理論における最古の概念の一つです。その起源は古代の修辞学にあり、ローマの作家キケロ(紀元前106 - 43年)やクインティリアヌス(約35 - 約96年)の思想にさかのぼります。修辞学では、文法的正確さ(latinitas)、明瞭さ(perspicuitas)、簡潔さ(brevitas)と並んで、「適切さ」は演説に求められる基本要件の一つとされています。

これら(latinitas, perspicuitas, brevisitas, aptum)は思考を明確に表現するために役立ち、意味の曖昧さ(obscuritas)を排除することを目的としています。この考え方は建築にも応用できます。というのも、演説と建築の両方は実践志向の文化技術であり、人々の思考と行動に影響を与えることを目的としているからです。

伝統的に、「適切さ」は以下の三つの領域に関連付けられます：

1. 一つめは、人間のニーズに適合するように、個々の建築要素を相互に適切に関係付ける「適切な尺度」を表します。
2. 二つめは、人間に対する適切な配慮だけでなく、材料に対する適切な配慮も含みます。このため、「適切さ」という概念には材料に特有の側面もあります。
3. 三つめは環境に関する側面であり、特に環境全般および自然資源に対する適切な配慮の問題を指します。

したがって、「適切さ」の要求は単に目的の達成に還元されるものではありません。その本質は、人間、材料、環境という三重の倫理的機能にあります。

古典的な修辞学の伝統は、ルネサンス初期に立ち返ったレオン・バッティスタ・アルベルティ(1404-1472)によっても引き継がれました。彼は著書『建築についての十書』(1485)において建築理論を展開し、キケロの思想を基に「適切さ」や「正しい尺度」を建築理論の中心的概念としました。アルベルティはその著作で、「建築における最高の評価は、何が必要であるか、また何が必要に適しているかを正確に判断できることである」と述べています。建築において「適切である」と感じ取る能力ほど重要なものはない、とも語っています。

アルベルティの著作は徹底して「適切性」の問題に捧げ

られています。彼にとって適切性には、調和(concinnitas)、均衡(proportio)、装飾(decorum)も含まれます。建築とは、個々の要素を互いに関連づけ、相互の関係性を構築する行為であります。そして、何が適切であるかは、気候や文化、材料や資金の利用可能性、人々の希望やニーズといったさまざまな要因に依存します。変化し続ける文化的な力関係の中で、内容、用途、評価に関する適切性は、常に新たに見直されなければなりません。

ここで問題となるのは、適切性がどのように決定されるのか、その基準や指針、評価基準がどこから得られるのか、そして特定の場所や時代、文化的文脈の中で何が適切で有益であるのかということです。例えば、グリーンランドの厳しい気候の中で人間が人間らしい生活を送るためには、雪で作られた家が適切な環境となります。しかし、雪の家がすべての場所で人々のニーズを満たすわけではありません。他の地域では、粘土で作られた小屋や、エルンスト・マイによるフランクフルトのレーマーシュタット団地のワンルームマンション⁵⁾、⁶⁾、1930年代のモスクワにおける集合住宅(コミュナルカ)、あるいはベルリン・グルーネヴァルトのヴィラ⁷⁾が適切な場合もあります。極端な状況では、バンカーや地面に掘られた穴ですら、生存を目的とした環境として適切性を発揮することもあります。

適切性を決定する基準に関する問いに対しては、最古の建築理論に立ち返ることができます。マルクス・ウィトルウィウス・ポリオ(紀元前80年頃～紀元前15年頃)、通称ウィトルウィウスは、著書『建築論(De architectura libri decem)』において、建築の基本原則を明示しようと試みました。ウィトルウィウスによれば、建築物は以下のように実現されるべきであると述べられています。

「建物は、堅牢さ、実用性、美しさに配慮して建造されるべきである。堅牢さは、基礎がしっかりした地層まで掘り下げられている場合に考慮されるでしょう。実用性は、部屋の配置が使用上の欠陥や障害を生じさせないように設計されている場合に満たされます。美しさについては、作品の見た目が適切で魅力的である場合に考慮されます。

堅牢性(firmitas)、有用性(utilitas)、美しさ(venustas)」という概念を用いて、ウィトルウィウスは建築の基本原則を示したと一般的に理解されています。これらは理論上の概念であり、具体的な場合には建築家がそれに具体的な形を与える必要があります。堅牢性、有用性、美しさは、たとえばコリント式の柱、レンガ造りのアーチ、鉄骨の骨組みやコンクリート壁、ゴシックのトレーサリー、バロックの流れるような形状、新建築の立方体的

な建築物など、多様な形で現れる可能性があります。

一般的には「ヴィトルウィウスの三位一体(Trias)」として、*firmitas*, *utilitas*, *venustas*が語られますが、ラテン語の原典ではヴィトルウィウスが異なる表現をしていることが指摘されています。彼は「*ratio firmitatis*, *utilitatis*, *venustatis*」という言葉を使用しました。この*ratio*という概念が示すように、彼が重視したのは堅牢性の考え方や概念(*ratio firmitatis*)、有用性の考え方や概念(*ratio utilitatis*)、そして美しさの考え方や概念(*ratio venustatis*)でした。ヴィトルウィウスは、堅牢性、有用性、美しさとは何かを問うのではなく、堅牢性、有用性、美しさが建築においてどのように実現され、具体的な形として具現化されるのかを問いました。ここでは、「何であるか(Was)」という問いよりも「どのように(Wie)」という問いが重要視されています。中心にあるのは、「どのように」という知識、すなわち、各要素を適切に関連付けて意味のある関係性を構築する方法についての知識です。*ratio firmitatis*, *ratio utilitatis*, *ratio venustatis*という三位一体によって、建築は存在論的な視点、つまり建築の存在そのものを探求する視点ではなく、認識論的な視点、すなわち建築に関する知識と知識実践を問う視点を示しています。

ヴィトルウィウスの著書『建築についての十書(De architectura libri decem)』は、15世紀に再発見され、古代の手本に基づく建築再生の最も重要な資料となりました。特にアルベルティが、ヴィトルウィウスの著作を批判的に吟味しながら、建築再生の基盤としました。アルベルティは単にヴィトルウィウスに従ったわけではなく、むしろその内容を批判的に問い直すことで、ヴィトルウィウスの書が執筆から1,500年後であるにもかかわらず、その時代に応じた追加を受け入れられる柔軟性を持つことを可能にしました。これにより、この書は形成されつつあるルネサンスにおいて、現代性を獲得し、模範、あるいは批判的に再解釈された模範としての地位を得ることができました。

アルベルティは自著『建築についての十書(De re aedificatoria, 1452)』において、ヴィトルウィウスへの批判を率直に表明しました。その序文において、アルベルティは先見の明をもって、「最も重要なのは必ずしも…」といった認識を述べています。

建築の役割は、ヴィトルウィウスが主張したように、人々を天候から守ることにあるべきだとされます。確かに、「水や火が、人間社会が形成されるきっかけを与えた」と言う人もいます。しかし、アルベルティはこう述べています。「天井や壁の有用性と必要性を考えると、これら

が火や水以上に、人々を結びつけ、結束させることに大いに貢献したと自然に確信するに至る。」建築の第一の使命は、自然からの保護だけでなく、社会的な出会いを可能にすることにあります。

一方、ヴィトルウィウスはこう記しています。「人間は原始時代には野生動物のように森や洞窟で生まれ、孤立して生活していました。しかし、火を制御できるようになったことで、その周りに集まり始めました。そして互いに気づき合い、話すことを学び、火を中心に初めて共同体を形成しました。その後、彼らは建築を始め、一部は、葉を使って屋根を作り、他の者は山の下に洞窟を掘り、またある者はツバメの巣やその構造を模倣して、粘土や枝を使って居住地を準備しました。」ヴィトルウィウスによれば、建築は言語を習得し、火の周りに集まった後に発展し、鳥の巣や洞窟など自然の模倣として生まれました。

アルベルティはヴィトルウィウスの議論を逆転させ、建築こそが社会的な出会いを可能にする場を生み出すのだと示しました。天井と壁が初めて、人間が共同体として過ごせる場を作り出す。建築は人間の社会化の前提条件なのであります。こうしてアルベルティは建築の社会的機能を保護機能の上位に置き、建築に対する視点の転換を導きました。この考えはアルベルティ自身が深く追求しなかったものの、徐々に現代建築理解の基盤となるものとなりました。アルベルティによれば、建築は単に厳しい環境条件への反応として生まれるのではなく、むしろ空間の創造を通じて人間の共同体形成の可能条件を提供する行為であるという点で、少なくとも同等に重要であります。

建築理論とは、建築が構想され、制作され、効果を発揮し、存在することについて、また建築が文化的な役割を果たすことについて、広範囲にわたる変動的な文化的力場の中で批判的に考察することです。

批判的考察の目的は、人間が純粋な自然状態とは異なる、自分にふさわしい環境を創り出すための基盤となる概念やモデルを問い直し、確認し、あるいは新たに構築することです。

3. 建築理論の三つの考察形式

建築についての考察の出発点および契機は、文化的力場が常に変化しているという事実です。時には、日常生活実践や建築における慣習に痛みを伴う断絶をもたらすこともあります。この点をウォルター・ベンヤミン(1892- 1940)は、19世紀に形成された機械時代に関する分析において明晰に記述しています。

ベンヤミンは1936年の論文「技術的複製可能性の時代における芸術作品」の中で、新たな技術的複製手段、機械生産、そして新素材が、「我々の時代の大量運動」と相まって「伝統の大規模な動揺」を引き起こしたと述べました。この変動は、「人類の現在の危機と再生の裏側」を形成しているとししました。彼によれば、機械や機械生産(ベルトコンベア、大量生産、標準化)は「事物の歴史的証言性を揺るがし」、文化遺産における「伝統的価値の清算」に繋がりました。彼は、伝統が模範としての力を失ったことが、近代の文化的力場における変化とシフトの引き金になったと考えました。

手工業的な製造手段から機械生産への移行は、連続化、標準化、類型化をもたらしました。この変化とともに、労働者階級や事務職層の形成、大家族から核家族への移行、都市の拡大とそれに伴う社会的・衛生的問題の増加など、社会の変化が建築家たちに新たな課題を突きつけました。その結果、建築は部分的に伝統的な枠組みから解放されるに至りました。簡単に言えば、宮殿や邸宅、教会を建てるのが求められるのではなく、鉄道駅のホールや百万都市の市庁舎、ガソリンスタンドや保険会社の管理ビルを建てるのが課題となったのであります。

加速する文化的ダイナミクスの中で、現代は、哲学者ユルゲン・ハーバーマス(1929年生)の言葉を借りれば、「その指針となる基準を、もはや他の時代の模範に依拠することはできず、自らの内に規範性を見出さなければならない。現代は、逃避の可能性もなく、自らに向き合わざるを得ない。このことが、自己理解の揺らぎ、そして我々の時代に至るまで続く、自己を『定立』しようとする試みの果てしないダイナミクスを説明しています。」

建築批評には、建築が公共の関心事であることが反映されています。したがって、ここでは個人と社会との関係が扱われており、建築理論は批評として応用倫理学となります。

第二の反省形態は、建築を物質的かつ構造的な実践として体系的に反省することを指します。これを狭義の建築理論と呼びます。これは、建築がどのように作られ、存在するかという問題を問い、材料の選択、加工、使用方法、効果の可能性についても考慮します。ここでは、人間がどのように住むかというアイデアの具体的な物質化と空間化が問題となります。「住む」という概念は、住居に限定されるものではなく、仕事、製作、余暇など、外部および内部空間での活動をすべて含んでいます。狭義の建築理論が物質化の過程に焦点を当てている限り、これは実践的美学となります。

建築の文化的な全体像における反省は、建築の哲学として言及されます。実現や物質化の問題を超えて、建築の文化的小および思想的な基盤に焦点を当て、すなわちコンセプトの問題に関わります。これは、建築の象徴的・現象的な現れ、それらの認識可能性や有効性、具体的にはその視覚的・認識的な認識可能性を含みます。文化的な力の変化する場における建築の多様な関係をテーマとする建築哲学としての建築理論は、批判的な認識論と言えます。

これら三つの反省形態は、広義の建築理論として総称されます。これにより、建築批評、建築理論、建築哲学が一つの体系としてまとめられます。しかし、実際には、これら三つの反省形態は常に相互に絡み合っています。その分離は分析的なものであり、明確さを求めるものです。実際には、三つの反省形態は互いに影響を与え合い、応用倫理学、実践的美学、批判的認識論は常に重なり合い、互いに含まれています。

4. 脇道：認識論的基盤

建築の特異性に焦点を当てるためには、建築に関するあらゆる反省が、建築が自然から模倣的に原理を引き出すのではなく、文化技術であるという事実と直面しなければなりません。自然は通常、建築の実践の模範ではありません。自然に関して言えば、例えば基礎や組積造、または屋根、壁、窓、扉などには模範がありません。

それらは発明であり、直角もまた発明であります。たとえ直角が自然の中で一部のケースに現れることがあっても。異なる特性を持つ石、木材、鋼、またはレンガなどの素材を組み合わせるためのシステムとしての直角は、純粋に人間の発明であります。

建築は、イマヌエル・カント(1724-1804)の言葉に従えば、「異なる理性」に基づいて模倣されたものではなく、独自の知識論理に従うものです。このことが何を意味するかについて、カントは『純粋理性批判』(1781年)の中で「建築学」の概念を定義しています。「建築学とは、ある芸術を意味する」と述べられています。したがって、建築学とは、「異なる材料や性質の単なる集合体を一つのシステムにする」活動であり、このシステムは「一つのアイデアの下で様々な認識の統一」を意味します。これは「ラプソディック(即興的)」な認識の概念とは対極にあります。カントにおける「ラプソディック」は、ギリシャの巡回歌手であるラブソードと、音楽の器楽または声楽作品を意味するラブソディーに由来しており、テーマが形式的な統一性や内的必然性なしに結びつけられる方法を示しています。建築は、個々の要素を全体として系統的

に組み合わせ、再構成する可能性によって、これと異なるものです。

したがって、建築学は、アイデアに従って物事を組み合わせる技術です。カントは、物事を組み合わせる方法として、外的な類似性や模倣性に基づくものと、内的な関係性や類似性に基づくものを区別しました：

1. 類似性や模倣性は、外的で形式的な基準に基づく参照です。たとえば、大理石の像はその形状において人間に似ています。また、家の線画は形式的な類似性により家として認識されます。この場合、形態と参照対象との関係は外的で形式的なものです。カントはこれを「技術的な統一」と呼びました。

2. 一方、関係性や類似性は、内的な特性や類推に基づいて物事を結びつけることを可能にします。この場合、物事はアイデアや「いくつかの最上位かつ内的な目的」に従って結びつけられます。カントはこれを「建築的統一」と呼びました。

カントの建築学の概念は、建築だけでなく、物理学、化学、言語、さらには一般的な科学の体系にも関連しています。建築学から建築への特定の移行は、参照が行われる問いに焦点を当てることによってなされます。したがって、建築は、素材や構造、使用法や行動、文脈や雰囲気など、異なる知識の形式がアイデアに従って意味を持つ関係を形成することによって生まれます。建築は、木材、石、ガラスなどの異なる素材がアイデアに従って基礎、壁、天井、屋根などの建築部材に組み合わせられ、これらがさらにアイデアに従って相互に関連し合うことによって、最終的に建物が形作られる時に生まれます。カントによれば、建築はその原則を利用可能な材料、構造的手法、文化的目的から体系的に発展させる文化技術であるとされています。このような知識の実践として、カントは建築に関して二つの知識の発展線を挙げています。

1. 知識としての「*cognitio ex principiis*」：これは理性による認識に基づいています。カントはこれを合理的な発展線とも呼び、物事、文脈、そして手法そのものから直接的に導かれるものとしています。具体的には、以下の点に関しての理性による認識の結果です：a) 材料(鋼、石、レンガ、木材、またはガラス) b) 工具(ハンマー、彫刻刀、のこぎり、または釘)および加工方法(溶接、リベット、釘打ち、のこぎり、または研磨) c) 一般的な文脈における気候的、経済的、または人類学的条件
2. 知識としての「*cognitio ex datis*」：これは伝承から来るもので、カントはこれを歴史的発展線とも呼びま

した。この知識は論理的に導かれるものではなく、世代を超えて伝えられていきます。この認識の形態は次の点に基づいています：a) コミュニティの中で伝承される文化的実践 b) 特定の歴史的状況 c) 日常生活における経験と方向性に関する知識

結論として、建築はシステムの芸術としての建築学という意味において、二つの知識実践に基づいていると言えます。それは、原理に基づく知識(*ex principiis*)と歴史に基づく知識(*ex datis*)であり、これは原理に基づく知識もまた世代を超えて伝承され得ることを意味します。しかし同時に、建築としての知識実践は、原理に基づく知識だけでは完全には決定されません。原理に基づく知識にも多くの可能性が残されており、物事をどのように行うかにはさまざまな選択肢があるのです。したがって、設計は決して原理に基づく知識だけに収束することはないのです。

5. 三つの歴史的な段階

建築理論が文化的な力場が変化する文脈の中で建築を扱うのであれば、それは時間的な次元を持ち、その結果として歴史的な体系性も持っています。この体系性は、建築の変容の歴史的な過程だけでなく、建築に対する反省の歴史的な変化も含んでいます。歴史的体系性に注目すると、建築理論には建築に対する反省の三つの歴史的な段階が区別できます：

1. 前近代の時代における建築への思索
2. 工業化の始まりにおける伝統的理論
3. 20世紀半ばからの批判的理論、そしてデジタル時代における批判的認識論への拡張

「前近代の時代における建築への思索」は、封建的および前近代的な社会における建築に対する反省を指します。この時代において、文化的な力場は長い時間をかけて変化し、知識は大きな断絶なく世代から世代へと受け継がれました。これにより、ルネサンス、バロック、ロココ、古典主義といった異なる形態や様式が現れましたが、建築への思索の段階は、時代の移行の際に建築の社会的地位が疑問視されることはなかった点で特徴づけられます。建築は本質的に象徴的な機能と結びつき、それに基づいて表現の形態に関わっていました。この時期の重要な著作には、レオン・バッティスタ・アルベルティ、アンドレア・パッラディオ(1508-1580)、マルク＝アントワヌ・ロージェ(1713-1769)、エティエンヌ＝ルイ・ブーレ(1728-1799)によるものがあります。

近代の初期における建築への反省は、「伝統的な建築理論」として説明できます。伝統的と呼ばれるのは、技術

的・物質的、社会的・文化的、そして美学的・哲学的条件の変化の中で、伝統の模範的役割の喪失と、それに伴う建築の不安定さを含んでいるからです。19世紀以降の技術的および社会的変化によって、建築はもはや無批判に伝統に依存することができなくなりました。近代の登場により、建築実践のための指導的な理論に関する問題がより根本的に問われるようになりました。特に20世紀の転換期には、建築の原理と本質に関する問題が理論の中心に据えられるようになりました。ゴットフリート・ゼンパー(1803-1879)はまだ伝統的な理論の境界に立っていましたが、伝統的理論の本当の主人公たちは、オットー・ワグナー(1841-1918)、ルイス・サリバン(1856-1924)、ヘンリー・ヴァン・デ・ヴェルデ(1863-1957)、フランク・L・ライト(1867-1959)、アドルフ・ロース(1870-1933)、ル・コルビュジエ(1887-1965)、ヴァルター・グロピウス(1883-1969)、ミース・ファン・デル・ローエ(1886-1969)などが含まれます。

20世紀の1950年代には、現代そのものが危機に直面しました。これにより、建築に対する新たな反省の形が生まれました。これを「建築の批判的理論」と呼ぶことができます。従来理論のように、変化した文化的力学の中で伝統が困難になることを問題とするのではなく、理論的反省は今や、現代建築実践の内在する矛盾や対立をテーマとして取り上げるようになりました。現代建築の矛盾に満ちた全体が中心に据えられ、「現代の現代批判」が語られるようになったのです。建築の批判的理論の主要な登場人物には、レイナー・バンハム(1922-1988)、ロバート・ヴェンチュリ(1925-2018)、デニズ・スコット・ブラウン(1931-)、オスヴァルト・マティアス・ウンガー(1926-2007)、アルド・ロッシ(1931-1997)、ピーター・アイゼンマン(1932-)、ハインリヒ・クロッツ(1935-1999)、およびレム・コールハース(1944-)がいます。

しかし、21世紀に入ると、また異なる基本的な態度が求められるようになりました。この反省の形は「建築の批判的認識論」と呼ばれることができます。この言葉は、建築の理論的反省の出発点が根本的に変わったというよりも、批判的理論の領域がテーマ的に広がったことを示唆しています。デジタル化と情報化により、変化した知識基盤と知識の実践が反省の中心に位置するようになり、それと並行して激化する都市化および環境問題も含まれるようになりました。アナログの機械を背景に批判的理論として形成された建築の思考は、今やデジタル化の論理によって覆い隠されています。デジタルファブリケーション、パラメトリックデザイン、BIM(ビルディ

ング・インフォメーション・モデリング)などの技術により、コンピュータプログラムのアルゴリズムが設計、建設、組織のプロセスに介入し、その尺度で建築を内側から変えていっています。

建築理論にとって、転換期、危機、そしてそれに伴う建築の概念における変動の時期は特に重要であります。慣習が崩れ、疑問視されるところでは、建築の内的な構造が顕在化します。ここに建築理論の焦点があります。建築理論は、変化をその因果関係の中で明示し、分析しようと試みます。なぜなら、無根拠で文化的な論理の外にあるものなど存在しないからであり、たとえそれが無意識のうちに起こるものであってもそうであります。建築理論の仕事は、まさにその暗い部分に取り組み、構造を可視化し、それに関連する内容を認識可能にすることにあります。

おわりに

グライター教授の文章には相変わらず、多くの哲学者や研究者の文章が引用されている。グライター教授が大変な読書家で勉強家である証である。我が国においてもグライター教授に対抗して東洋哲学で武装して独自の建築理論を展開して下さる方はいないものであろうか？東洋哲学は自然を相手にしたり、孔子の論語のように「人はいかに生きるか」と言った事を論じているものが多い。これは実際には一番難しい話であるが、西洋哲学に比べれば一見やさしそうに見える。この事が東洋哲学を展開して建築理論展開をしていくことを難しくしているのであろう。

〈参考文献〉

- 1) Jörg Gleiter原著、田中辰明訳：グライターの宇宙・建築第1回 月刊建築仕上技術2025年3月号
- 2) Jörg Gleiter原著、田中辰明訳：グライターの宇宙・建築第2回 月刊建築仕上技術2025年4月号
- 3) Jörg Gleiter原著、田中辰明訳：グライターの宇宙・建築第3回 月刊建築仕上技術2025年5月号
- 4) Jörg Gleiter原著、田中辰明訳：グライターの宇宙・建築第4回 月刊建築仕上技術2025年6月号
- 5) 田中辰明：建築家エルンスト・マイの生涯と作品(その1) 月刊建築仕上技術2015年2月号
- 6) 田中辰明：建築家エルンスト・マイの生涯と作品(その2) 月刊建築仕上技術2015年3月号
- 7) 田中辰明：森のジードルング「オンケルトムズヒュッテ」訪問記 月刊建築仕上技術2025年2月号